

## 接続詞の選択に表れるジャンルの論理的特徴

石黒圭（国立国語研究所）

### 1. はじめに

接続詞は、原則として文の先頭に立ち、先行文脈と後続文脈の関係を示す品詞である。言語過程観に基づく時枝(1950)において、質的統一体としての文法論の対象として、従来の「語」「文」にくわえて「文章」という単位が設定され、思想の展開としての文章を考えるときに辞である接続詞の重要性が説かれた。それを契機に文章論という分野が立ち上がり、先行文脈と後続文脈の論理的な関係を分類する接続類型の研究が盛んになり（市川(1978)など）、その枠組みを意識しながら個々の接続詞の記述的研究が行われてきた。

これらの研究は現在でも文章の文法研究の主流であるが、限界もある。先行文脈と後続文脈の論理的関係以外の要因でも接続詞の選択は行われているからである。なかでも重要なのは、文体という観点である。たとえば、「でも」と「しかし」の選択を考える場合、前後の文脈の論理的関係よりも、話し言葉の「でも」と書き言葉の「しかし」の文体差として割りきったほうが実態に即している。また、同じ話し言葉、書き言葉でも、接続詞はジャンルの違いで細かな使い分けがなされることが多く、文体・ジャンルといった観点から、文章の文法研究にない多くの知見が得られる可能性がある。こうした研究観点はコーパス研究と親和性が高く、近年のコーパス研究の隆盛とともに増加する傾向にある。

以上のような研究動向を踏まえ、本発表では、接続詞的に使われる副詞や慣用的な連語も接続詞として広く捉え、ジャンルの違いによる接続詞の使い分けについて具体例を挙げながら紹介する。同時に、あるジャンルにおけるある接続詞の選択が、そのジャンルのどのような性質と結びついているのか、そのジャンルの特徴についても合わせて考察する。

### 2. 接続詞の情意表示用法—話し言葉の接続詞その1

接続詞を使うと論理的になるという考え方がある。それは、話し言葉、とくに対話（ダイアログ）では当てはまらないことが多い。なぜなら、話し言葉の接続詞には、論理的な手続きを踏んでいるふりをしながら、あらかじめ用意した結論に帰着させる、いわば、論理性の欠如をカムフラージュする情意性の高いものが少なくないからである。

なぜ対話では論理よりも情意が優先されるかということ、対話には話し手と聞き手が向かいあう対面性があるからである。書き言葉とは異なり、対話には場面が存在し、話し手という個と聞き手という個がぶつかりあう。そうした互いの顔が見える環境では、話し手の自己への執着が露わになると同時に、目の前の聞き手への配慮も働く。対話のそうした場面的性格が対面性を生み、それが接続詞の用法にも影響を及ぼすと考えられる。ここでは、こうした接続詞の情意表示用法を順に見ていくことにしたい。

## 2.1 自己正当化用法

接続詞の情意表示用法の典型に自己正当化がある。自己正当化は予想される非難に反論し、理由を用いてその正当性を補強することが多い(鶴田 2005)。そのため、話し言葉では、反論を開始するさいに「でも」を、理由を開始するさいに「だって」を用いて、反論や理由の予告を行うが、聞き手の目にはそれが子どもっぽいやい訳に映りがちである。

(1) でも、お兄ちゃんが先に手を出してきたんだよ。

(2) 復習はやりたくないな。だって、面倒くさいし。

こうした「でも」や「だって」は論理的であるとはいいがたい。論文のような書き言葉では客観的な論理の積み重ねのなかで接続詞が用いられるが、対話の接続詞は主観的な論理、すなわち自分にとって都合のよい論理に基づいて使われる傾向があるからである。

## 2.2 牽強付会用法

自己正当化用法の延長線上にあるのは牽強付会用法である。牽強付会とは、自分の都合に合わせて理屈を強引にこじつけることであり、聞き手から見て非論理的に映る。(3)(4)は、牽強付会用法の「だから」である。

(3) {考えが拒否されたことにいらだち} だから、さっきから何度も言ってるでしょ。

(4) びしょ濡れじゃない。だから、今朝、傘持って行ったらって何度も言ったのに。

「だから」は、先行文脈に根拠を取り、後続文脈に主張を取る。話し手にとっては「だから」を用いることで根拠から主張を導きだしたつもりでも、聞き手にとっては話し手の論理の押しつけのように響くこともあろう(加藤(1995)、萩原(2012)など)。

また、理詰めで説得できなくなったとき、「とにかく」によって結論を持ちだすことも対話においてよく行われる。

(5) とにかく、駄目なものは駄目。

「とにかく」は「とにかくにも」であり、先行文脈に選択肢が示され、そのどれを選んでも同じ結論に至ることを示すのが本来であるが、論理的に破綻しているときに持ちだされる「とにかく」は先行文脈の帰結ではなく、むしろ無効化に働いている。

## 2.3 意味の希薄化用法

前項の牽強付会用法で見たように、対話で頻用される接続詞は本来の意味が希薄化する傾向にある。よく指摘されるのは、逆になっていない「逆に」である。(6)のB1では先行文脈と後続文脈が反対の意味になっているが、B2では「逆に」がそれどころかの意味で使われ、言い換えに近づいてきている(北原編 2007)。

(6) A 「一人でいることがストレスにならない人って周りにいない？」

B1 「うん、いるいる。逆に、孤独がつかなくて楽しめない人もいるよね」

B2 「うん、いるいる。逆に、孤独をすっかり楽しんでいる人がいるよ」

言い換えの「というか」の変種「ていうか」「てゆうか」「つか」「てか」は、言い換えの意味が薄れ、単なる話題転換で使われることが多い(吉澤(2003)、原田(2015)など)。

(7) {渡辺さんの生まれたての赤ちゃんの写真を見て} 見て、渡辺さんの赤ちゃん、超かわいいんだけど。てか、渡辺さんに似て、眉毛濃くね？

「しかし」をはじめとする逆接の接続詞が転換の用法を持つこともよく指摘される現象

である（岩澤（1985）、浜田（1995）など）。

- (8) A {山頂ようやくたどり着き}「うわあ、すごい景色だね。いい眺めだなあ！」  
B {少し間を置いて}「しかし、疲れた……」

このように、話し言葉では接続詞が本来有する論理的な性格が薄れ、意味が希薄化するという現象が見られる。

## 2.4 他者配慮用法

対話における接続詞は、自己の感情を表出するものばかりではない。相手が目の前にいる関係で、他者配慮となるものも多い。つまり、接続詞の使用動機として、話し手の感情だけでなく、ある種のポライトネス・ストラテジーとして聞き手の感情に配慮するものもあるわけである。相手の言葉を先行文脈として接続詞を使う場合、相手の意見が先行文脈に含まれるときは、「それで」のような順接の接続詞が好んで用いられる。

- (9) A「なんで今日の府中、混んでるのかな。サッカーの試合でもあったのかな？」  
B「いや、競馬場でG Iが開催されたんでしょう」  
A「そっか。それで、こんなに人が多いのか」

一方、先行文脈が相手自身を否定するような内容を含んでいる場合、「でも」のような逆接の接続詞を使って内容を反転させ、相手のことを肯定する後続文脈になるように整えることが多い（萩原（2020）、井伊・石黒（2020）など）。

- (10) A「あたし、運動してもぜんぜん痩せないんだよね」  
B「でも、ウエストのあたり、けっこう引きしまってきたんじゃない？」

また、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして「ただ」が使われることもある。相手の発話内容に異なる意見を述べるとき、「ただ」を使うことで、相手に一定の賛意を示しつつ意見の相違点や問題点を控えめに示せる（川越（2003）、陳（2008）など）。

- (11) おっしゃることはよくわかります。ただ、ご指摘が当てはまらないケースもまれにあるように思うのですが。

## 3. 接続詞の探索表示用法—話し言葉の接続詞その2

前節の接続詞の情意表示用法は対話（ダイアローグ）でよく見られるが、ここで検討する探索表示用法は独話（モノローグ）によく見られる。書き言葉では書き手が文章の作成にいくらでも時間を割けるが、話し言葉では聞き手が目前にいるため、限られた実時間のなかで話を紡がねばならない。とくに独話では、一方が長く話しつづけるため、話し手が話題を思い出し、組み立てるための処理時間が必要になる。独話においてそうした処理時間の確保に使われる接続詞を、ここでは検討したい。

### 3.1 話題継続用法

独話では、「あの一」「えーと」などのフィラーが、話の内容や表現を脳内で検索するさいの時間稼ぎに使われる。そうしたフィラーに相当する接続詞の表現は「で」である。「で」は、講演・講義といった独話でもっとも多く使われる接続詞であり（高橋（2005）、石黒（2010）など）、文字起こしのケバ取りのさい、「あの一」「えーと」などのフィラーと同様に、そのほとんどが削除される。接続詞「で」は、事前に用意した計画に沿って話をする

さいに話題の継続を確認するのに使われる標識で、論理関係を積極的に示すものではない。このため、書き言葉では不要だと判断されるのだろう。(12)は石黒(2010:147-148)で紹介された講義談話の例であり、接続詞「で」がフィラーのように頻用されている。

(12) えー、「『百敷や古き軒端の』は、順徳院には申訳無いが勝手に古い股引きと解釈して、結構な歌とは思わなかった。」{中略} で、「百敷や」という部分です。で、これは一、枕詞といわれるもので、これ自体には、意味があったけど、今わかんなくなっちゃってる。で、ただ、その5文字があると、なんらかのすぐ次に出てくる言葉を引き出すための、約束事になるんだってというようなことを中学でも高校でも習ってると思うんですが、で、ここだと「古い」という言葉を出してくるわけです。で、だけど、{笑い}何も知らずに耳で聞いてたら、聞き間違えて、ももひきの歌だと思い込んでいた。で、古いももひきなんて、なんでそんなものを歌ったのかなと解釈して、全然いい歌だとは思いませんでしたっていうんですね↑。

### 3.2 話題列挙用法

講義談話の接続詞で「で」の次に多く使われるのは添加の「それから」「そして」である。独話を準備している話し手は、計画段階で「この話をするときは、例としてこの三つを使おう」のように項目のリストとして頭に入れていることが多い。実際の発話で、そうした項目を列挙するときに用いられるのが「それから」「そして」である。(13)もまた、石黒(2010:145)で紹介されている講義談話の例である。

(13) 1986年くらいから、徐々に、その、育児とか、教育っていうのを他人任せにする風潮が出てきました。{中略} それから、この時期、食事のアウトソーシングの傾向っていうのが著しく、その一、えーと一、まあ、著しくなってきました。それは、マクドナルドとか、ファミリーレストラン、外食産業のお弁当屋さん、ほかほか弁当屋さんとか、コンビニ、それが町の至る所で、時間を構わず、24時間、いつでも温かいものが買えるというような仕組みができてきた。そして、このころから塾と学校のダブルスクールというのが大都市圏だけではなく、大阪や東京以外の、その、地方にまで及んでいった、そういう時代でありました。そして、その、えーと一、このころからやっぱり子どもたちの遊びの質というのが大きく様変わり、します。友達と集まって、校庭で、いろいろな遊びをしたりなんていうような、わたくしが子ども時代にやったようなそういう遊びっていうのは、まったく姿を消します。

## 4. 接続詞の構造表示用法—書き言葉の接続詞その1

書き言葉は、準備の時間が十分に確保できるため高い計画性を有している。ここでは、高い計画性に裏打ちされた構造表示用法を有する書き言葉の接続詞を検討する。

### 4.1 範囲指定用法

接続詞は連接類型論に顕著なように先行文脈と後続文脈の関係を示すものと考えられ、どう結ぶかという How が問題にされてきた。しかし、先行文脈と後続文脈の何と何を結ぶかという What も同時に重要である。先行文脈と後続文脈の結ぶ範囲は文という単位に留まらず、段落に及ぶこともある。接続詞の影響が及ぶ前後の文脈の範囲は機能領域(塚

原 1970)、あるいは連接領域 (井伊 2020) と呼ばれ、しばしば研究対象になってきた。

機能領域の広さは、先行文脈・後続文脈ともに狭いタイプ (「すなわち」など)、先行文脈が広くて後続文脈が狭いタイプ (「要するに」など)、先行文脈が狭くて後続文脈が広いタイプ (「たとえば」など)、先行文脈・後続文脈ともに広いタイプ (「一方」など) の四つに分かれるが (石黒ほか 2009a)、実際には段落での位置という要因が強く影響しており、同じ接続詞でも段落の冒頭で使われると機能領域が広がる傾向がある (井伊 2023 予定)。このような多層性は学術論文などでとくに発達しており、文章の大きな内容のまとまりやまとまり同士の関係を読み取るさいに、接続詞は大きな役割を果たしている。

## 4.2 遠隔共起用法

単独で使われる接続詞は、前後の文脈を軸とした 2 者間の関係を示すものであるが、二つ以上の接続詞が決まった組み合わせで使われることがある。よく知られているのが、「～。しかし～。そこで～。」のパターンであり、こうした組み合わせは、社説 (王 2015) や学術論文 (村岡ほか 2004) で頻用される。遠い位置にある接続詞同士が組み合わせとして意識され、文章のグローバルな意味的関連性を表す現象は、遠隔共起と呼ばれる。

また、石黒 (2005b) では、序列を表す接続詞の組み合わせを「第一に～。第二に～。第三に～」のような順序を問わないタイプ、「最初に～。続いて～。最後に～」のような順序を問うタイプ、「まず～。次に～。さらに～」のような両者を兼ねるタイプの 3 種に分けている (黄 (2013) も参照)。この種の遠隔共起もジャンルによって出現傾向が異なる。

## 5. 接続詞のジャンル特性用法—書き言葉の接続詞その 2

書き言葉のジャンルは話し言葉以上に多様性がある。書き言葉は何かを伝えたいという明確な目的志向性があることが多く、そこに接続詞のジャンル特性が現れる。書き言葉の接続詞と一口に言ってもジャンルによって使用実態はかなり異なり、石黒ほか (2009b) によれば、総文数にたいする接続詞の出現率は多い順に、論文では 25.5%、エッセイでは 13.2%、新聞の社説では 12.2%、小説では 10.4%、新聞のコラムでは 7.9%、ドラマのシナリオでは 3.0%となっている。どのジャンルでも逆接の出現頻度が高い点では共通し、新聞のコラムでは「だが」、ドラマのシナリオでは「でも」、それ以外の 4 ジャンルでは「しかし」が 1 位を占めるが、2 位以下は多様で、たとえば 2 位の場合、新聞の社説が「だが」、コラムが「しかし」なのをたいし、論文では「また」、小説とエッセイでは「そして」、ドラマのシナリオでは「だから」である。こうした傾向を眺めるだけで個々のジャンル特性が垣間見える。コーパスを用いたジャンル横断的な研究は今後の課題とし、ここでは、ある特定のジャンルに見られる接続詞の偏りを掘り下げることにしたい。

### 5.1 学術分野別特殊用法

上記のように書き言葉の主要なジャンルでは接続詞の選択傾向の違いが見られるが、主要なジャンルの下位にあるサブジャンルでも明確な違いが見られることが少なくない。石黒圭 (2016b) は、商学・経済学・国際政治学・法学・社会学という五つの社会科学分野の専門文献において、接続詞の選択傾向にどのような違いが見られるかを分析したものであるが、ここでは、特徴的だった法学の分野の接続詞の使い方の一部を紹介する。

法学は、総文数にたいする接続詞の使用率が 32.2%と、全体平均の 27.3%に比べても高く、接続詞をとくに好む分野であると言える。なかでも特徴的だったのは補足型の接続詞の使用であり、法学文献の接続詞ランキングで「なお」が 4 位、「もっとも」が 6 位、「ただし」が 10 位と軒並み使用率が高い。とくに、「もっとも」は全体の 72.4%を法学 1 分野だけで占め、突出している。原則にたいする例外など、論理に穴を開けるものを見つけたら、そこを後からでも埋めずにはいられない法学的思考の特殊性が表れている。

## 5.2 聖書の摂理用法

接続詞は翻訳者に悩ましい存在である。それは、キリスト教の聖書でも同様で、日本語として筋が通るようにするために、原文に存在する接続詞を削ったり、反対に原文にない接続詞を加えたりする。石黒（2015）では、日本聖書協会が発行する 1955 年刊行の『聖書 口語訳』と 1988 年刊行の『聖書 新共同訳』を比較し、総文数にたいする接続詞の出現率が『聖書 口語訳』では 25.2%（旧約 22.2%、新約 34.1%）、『聖書 新共同訳』では 12.9%（旧約 9.4%、新約 23.6%）であり、旧約よりも新約のほうが接続詞が多いこと、『聖書 口語訳』から『聖書 新共同訳』に変わったことで接続詞が半減したことを明らかにしている。

聖書の接続詞を種類から見ると、新約の福音書で「そこで、イエスは」、使徒言行録で「そこで、パウロは」のように使われる「そこで」、旧約の歴史書や創世記などで一連の歴史的出来事を閉じるのに使われる「こうして」、新約の福音書でイエスの奇跡をはじめとする決定的瞬間の導入に使われる「そのとき」、聖書全般で神の支配を示す因果関係に使われる「それゆえ」の四つが聖書の接続詞の特徴語と言える。こうした特徴語から、聖書では神の摂理を示すために接続詞が使われていることがわかる。

## 5.3 ニュースの臨場感用法

指示語を含む接続詞の場合、ソ系の指示語を含むのが一般的である。ただし、最後のまとめを表す「このように」「こうして」の場合はコ系が表れやすい（俵山(2006)、俵山(2007)など）。また、「それにたいし」や「そのため」に対応する「これにたいし」や「このため」も例外的にコ系がよく用いられる。

ジャンルとしてコ系の指示語を含む接続詞がよく用いられるのはニュースの原稿である（井上 2021）。石黒（2014）は同じ内容を扱った NHK のニュースと朝日新聞の記事を比較したものであるが、ニュースは新聞記事に比べてコ系の使用が総じて多く、ニュース原稿の構造上、冒頭のリード文が終わり、本文が状況導入の文で始まった直後に、「これに対し」「これを受け」「これについて」「これに関連して」「こうしたなか」といったコ系の接続詞的連語が集中する現象を指摘している。テレビのニュース番組ではリードが終わったとき、当該のニュースが扱っている現場が最初の映像として映しだされ、そこに状況導入の文がかぶせられる。その直後、最初の映像を受けて政府の要人が動き出すという映像に切り替わるというパターンが典型的である。そこで、上述のようなコ系の接続詞が使われることで、そのニュースに臨場感が加わるという仕掛けになっていると考えられる。

## 5.4 国会会議録の二重使用用法

接続詞には「だがしかし」のような二重使用と呼ばれる用法がある（馬場 2003）。二重使用には、類似の意味の接続詞を重ねる①接続詞の意味の限定・強調、前後の文脈の接続

に複数の見方があることを示す②複線の文脈の提示、後続の文脈の入れ子型構造を示す③多層的構造の提示の三つの用法があるとされる（石黒 2005a）。

接続詞の二重使用はジャンルとの関わりが強く、BCCWJ を用いた馬場（2013）の分析では、国会会議録において使用比率が高く、「そしてまた」「しかし一方」「また一方」「しかし同時に」の組み合わせが多いことが明らかにされている。国会会議録は国会のさまざまな会議の議事内容を文字化した資料で、発言者がそれぞれの立場からまとまった内容を話していることが多い。その意味で独話に近い性質を有しており、限られた時間のなかで、入り組んだ内容を出席者に効果的に伝えられる接続詞を選択することが求められるため、目立つ形式である二重使用が選択されていると推察される。

## 6. まとめ

話し言葉、とくに対話（ダイアログ）では、対話という対面性に由来する接続詞の情意表示用法が見られる。対話では客観的な論理よりも主観的な論理が前景化され、自己の論理に基づく自己正当化用法の「でも」「だって」、牽強付会用法の「だから」「とにかく」、意味の希薄化用法の「逆に」「てか」、および、相手の論理に寄り添う他者配慮用法の「それで」「でも」「ただ」などが観察される。また、話し言葉、とくに独話（モノログ）では、その場で話すという実時間性に縛られるなか、考えながら話を紡ぎだしていくための時間稼ぎが必要になる。このため、接続詞の探索表示用法が発達しており、話題継続用法の「で」や話題列挙用法の「それから」「そして」が頻用される。

一方、書き言葉は、話し言葉とは異なり、話を組み立てる十分な時間的余裕があり、その計画性に由来する構造表示用法が発達している。接続詞の直前直後の文だけでなく、より広範な先行文脈と後続文脈の読み取りが可能になるよう、範囲指定用法や遠隔共起用法が活用されている。また、書き言葉はジャンルが話し言葉以上に多様であり、明確な目的志向性があるのが特徴である。隙のない論理の積み重ねを重視する法学の文章、叙述をとおして神の摂理を伝える聖書の語り、速報性が高く現場の臨場感の共有を得意とするニュース原稿、複雑な内容を強いインパクトで伝えようとする国会会議録など、それぞれのジャンルの目的に合った接続詞が選択される傾向にある。

## 参考文献

- 井伊菜穂子（2020）「接続詞の接続領域の性質と認定基準」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, pp.31-42／
- 井伊菜穂子（2023 予定）「接続詞の出現位置からみた接続領域の広さの特徴—人文科学論文の接続詞を対象に—」『国立国語研究所論集』24、ページ数未定／
- 井伊菜穂子・石黒圭（2020）「上級日本語学習者の接続詞『でも』の使用実態と困難点」国立国語研究所シンポジウム『日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！』予稿集、pp.56-65／
- 石黒圭（2005a）「接続詞の二重使用とその表現効果」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』明治書院、pp.160-169／
- 石黒圭（2005b）「序列を表す接続語と順序性の有無」『日本語教育』125、pp.47-56／
- 石黒圭（2010）「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ編『講義の談話の表現と理解』くろしお出版、pp.138-152／
- 石黒圭（2014）「指示語にみるニュ

ースの話し言葉性」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房、2014.9、pp.115-135／■石黒圭 (2015)「聖書のなかの接続詞 一口語訳聖書と新共同訳聖書の比較から一」『New 聖書翻訳』2、pp.58-73／■石黒圭 (2016a)『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』実務教育出版／■石黒圭 (2016b)「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性一分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係一」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版、pp.161-182／■石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子 (2009a)「接続詞の機能領域について」『言語文化』46、pp.79-94／■石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋 (2009b)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12、pp.73-85／■市川孝 (1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版／■井上裕之 (2021)『ニュースの談話構造の総合的研究』ココ出版／■岩澤治美 (1985)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56、pp.39-50／■王金博 (2015)「「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」から見た社説の「開始部」の文脈展開」『日本語/日本語教育研究』pp.197-204／■加藤薫 (1995)「原因・理由を受けない「だから」一「だから」の主體的側面の突出一」『早稲田日本語研究』3、pp.14-31／■川越菜穂子 (2003)「補足の接続詞「ただ」「ただし」について一〈聞き手配慮〉を使用条件にした分析一」『人間文化学部研究年報』5、pp.82-101／■北原保雄編 (2007)「「逆に」「逆に言うと」(文頭)」『問題な日本語 その3』大修館書店、pp.142-146／■黄明侠 (2013)『「序列の接続表現」に関する実証的研究 一日中両言語話者による日本語作文の比較から一』ココ出版／■高橋淑郎 (2005)「大学講義を対象とした類型的文体分析の試み」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子(編)『表現と文体』明治書院、pp.35-46／■俵山雄司 (2006)「「こうして」の意味と用法一談話を終結させる機能に着目して一」『日本語教育論集』22、pp.49-57／■俵山雄司 (2007)「「このように」の意味と用法一談話をまとめる機能に着目して一」『日本語文法』7-2、pp.205-221／■陳相州 (2008)「日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態」『言葉と文化』9、pp.237-252／■塚原鉄雄 (1970)「接続詞一その機能の特殊性一」『月刊文法』2-12、pp.10-18／■鶴田庸子 (2005)「理由と原因と発話行為の正当化との微妙な関係一学習者に理解しやすい記述の試み一」『一橋大学留学生センター紀要』8、pp.3-15／■時枝誠記 (1950)『日本文法口語篇』岩波書店／■萩原孝恵 (2012)「『だから』の語用論一テキスト構成的機能から対人関係の機能へ一」ココ出版／■萩原孝恵 (2020)「『だから』の語用論的分析は、いかに日本語教育に生かせるか」宇佐美まゆみ編『自然会話分析への語用論的アプローチ』ひつじ書房、pp.251-286／■馬場俊臣 (2003)「接続詞の二重使用の分析一用例と各接続類型の特徴一」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』53-2、pp.1-17／■馬場俊臣 (2013)「接続表現の二重使用と文章ジャンルについて」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』63-2、pp.17-28／■浜田麻里 (1995)「トコロガとシカシ 逆接接続語と談話の類型」『世界の日本語教育』5、193-207／■原田幸一 (2015)「若年層の日常会話における「トイウカ」の使用一縮約形「てか・つか」に注目して一」『日本語の研究』11-3、pp.16-31／■村岡貴子・米田由喜代・大谷晋也・後藤一章・深尾百合子・因京子 (2004)「農学・工学系日本語論文の「緒言」における接続表現と論理展開」『専門日本語教育研究』6、pp.41-48／■吉澤文 (2003)「ディスコース・マーカーとしての「っていうか」の機能の分析」『東京外国語大学日本研究教育年報』7、pp.39-63